



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	幼児期・軽度発達障がい児と家族への支援
Author(s)	石塚, 百合子; 今野, 美紀; 上村, 浩太
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 8 号: 79-84
Issue Date	2005 年
DOI	10.15114/bshs.8.79
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/4918">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/4918</a>
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192879.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

## 幼児期・軽度発達障がい児と家族への支援

石塚百合子\*、今野美紀、上村浩太  
札幌医科大学保健医療学部看護学科

本報告は幼児期に軽度発達障がいを示す児童を早期に発見し、対応する必要性から、S市M保健センターの12年間の調査に基づき実施した内容である。

対象は1歳6ヶ月児健診の発達相談受診児813人と継続支援の必要な乳幼児精神発達相談受診児289人であった。発達相談は男児が女児の3倍多く、言語発達（発語）上の問題が多かった。次に多かったのは養育上の問題で近年増加傾向にあった。乳幼児精神発達相談の初診経路別では1才6ヶ月児健診から11人、保護者から4人、3才児健診から3人が軽度発達障害と診断され早期に専門医療を受けることができた。

1才6ヶ月児健診では、発語がなくても応答指さし、欲求指さしや大人に視線をあわせられること、手先が器用であることは発達が正常範囲であることが示唆された。

<キーワード> 幼児期軽度発達障がい児、1才6ヶ月健診、乳幼児精神発達相談

### Support for infants with mild developmental disorders and their parents

Yuriko ISHIZUKA, Miki KONNO, Kouta UEMURA

Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Nursing

This report discusses the necessity of early discovery and prompt response to developmental disorders in infants, who were checked at M public health center in S city for the past 12 years.

The subjects of this study were 813 children at their 18-month checkup for developmental disorders and 289 children with mental disorders who were advised to have further consultation at the health center.

Numbers of consultation for boys were 3 times larger than for girls. Speech trouble was the most common problem and the next was child-rearing problems which have increased recently. Referral routes for the primary check were as follows: 11 cases from the 18-month checkup, 4 cases from their parents and 3 cases from the 3-year checkup. Consultation for these cases resulted in diagnosis of mild development disorders and early treatment by specialists was successful.

At the 18-month checkup, active or reactive finger pointing, meeting the eyes of the adult and skilled or unskilled finger use may be related to the ability to understand and to development in the non-verbal period.

Key Words : Infants with mild developmental disorders, Eighteen-month checkup, Consultation for infants with mental disorders

Bull. Sch. Hlth. Sci. Sapporo Med. Univ. 8:79-84 (2005)

### I. はじめに

我国の障がい児教育の歴史は本格的には戦後の教育基本法からであり、1979年の養護学校教育の義務制の実施で確実になった。「21世紀の特殊教育の在り方について」で2001年1月に従来の特殊教育から通常学級にいる特別な教

育的ニーズをもった子どもも支援することになり<sup>1)</sup>、2003年3月に乳幼児期から学校卒業後まで子ども及びその保護者等に対する相談及び支援を行うことが公表された<sup>2)</sup>。

軽度発達障がい児に最も早くから関わる機会の小児医療の看護職者として、早期発見・早期対応を目指して1才6ヶ月児健診の発達相談、乳幼児精神発達相談の12年間の記録・調査結果について報告する。

\*前札幌医科大学保健医療学部看護学科

<連絡先> 上村浩太：〒060-8556 札幌市中央区南3条西17丁目 札幌医科大学保健医療学部看護学科



## II. 方法

### 1. 対象

- 1) M区保健センターにおける1才6ヶ月児健診受診総数、15,166人
- 2) 1才6ヶ月児健診の発達相談受診総数、813人、1人10～15分間の相談
- 3) 乳幼児精神発達相談受診総数289人、予約制で1人60～90分間の個別相談、90分間の集団遊び、10～30分間の電話相談
- 4) 相談・遊びにはパンフレット(「家庭でできる口腔筋機能療法(幼児編)」、「遊びで口腔筋機能を育てる」、ことばのキャッチボール「いつ話しかけたらいいか」、「どんなふうに話しかけたらいいか」)(図4～7)、微細運動(手先の運動)を高める玩具を使用した。

### 2. 倫理的配慮

- 1) 相談を受ける場合、事前に十分かつ分かりやすい説明を行い、調査の理解と同意を得た。
- 2) 同意した後も自由に拒否することができる。また、拒否したことにより、相談上の不利益な扱いを受けることは決してないことを告知した。
- 3) 個人的情報を他者に漏らすことのないようプライバシーを保護することを約束した。

## III. 結果

対象とした保健センターのあるM区概要は、S市の6割近くの区域を有する農業の割合が比較的高い典型的な郊外住宅地であり、2001年10月現在人口は10区中第7位、年少人口(0才～6才)が14.2%(10区中4位)であり、老人人口が16.3%(10区中1位)であった。

### 1. 1才6ヶ月児健診と発達相談

1990年4月から2002年3月の12年間で健診呼出総数16,619人、受診総数15,166人、1年間の平均呼出総数1,385人、平均受診総数1,264人であった。

発達相談総数813人、内訳は男児が609人で女児が204人で、1年間で平均67.8人であった(図1)。健診受診数と発達相談数の年次推移は、健診受診数は年々減少しているが、発達相談数は横ばいか、やや増加傾向にあった(図2)。

発達相談を理由別件数で見ると複数回答で1,181件であった。内訳は言語発達(発語)上の問題が481件、養育上の問題が307件、習癖・性格上の問題が174件、知能発達(理解)上の問題が133件、身体上の問題が86件であった。発達相談理由別の年次推移をみると養育上の問題が1995年度頃より増加傾向にあり、2000年度頃より顕著になった(図3)。

### 2. 乳幼児精神発達相談

1991年4月から2003年3月の12年間で受診総数289人であ

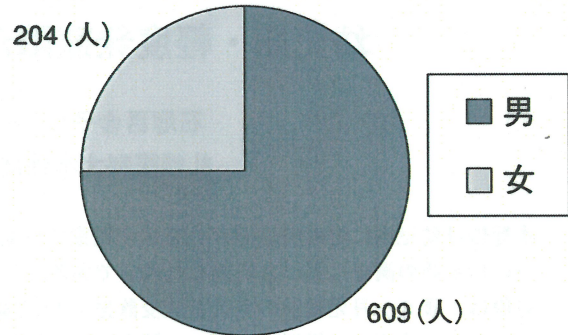


図1：総発達相談児数の性別

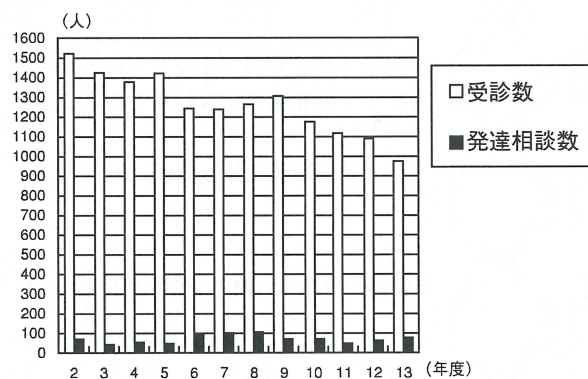


図2：健診受診数・発達相談数の年次推移  
(受診数は年々減少しているが、発達相談数は横ばいかやや増加している)

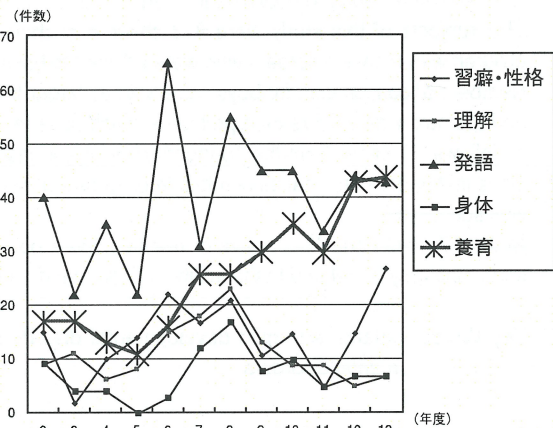


図3：発達相談理由の年次推移  
(特に、養育上の問題が増加傾向にある)

った。内訳は男児が211人で女児が78人であった。1年間の平均初診数は24.1人であった。乳幼児精神発達相談初診時の平均年齢は2才11ヶ月であった。乳幼児精神発達相談初診経路別をみると、1才6ヶ月児健診からが116人、保護者からが98人、3才児健診からが63人、近隣からが0人であった(表1)。

乳幼児精神発達相談の理由別件数で見ると複数回答で471件であった。内訳は言語発達上の問題が97件、養育上



表1 乳幼児精神発達相談初診経路

初診経路	人数
1才6ヶ月児健診	116
保護者	98
3才児健診	63
医療機関	6
保育所・幼稚園	3
近隣	0
その他	3

N=289

表2 乳幼児精神発達相談初診経路別主な他機関紹介内容

初診経路別	人数	内容
1才6ヶ月健診	11	精神発達遅滞 7
		自閉症 3
		多動児 1
保護者	4	精神発達遅滞 2
		自閉症 1
		難聴 1
3才児健診	3	精神発達遅滞 1
		自閉症 1
		てんかん 1

表3 1才6ヶ月児健診から—その後の結果 (主な5事例比較)

内容	ケース	1	2	3	4	5
発語 (有意味語)		マンマ イラつき強	ワンワン パッパ アーン	— イラつき奇声	3ヶ月前に消失 —	高熱後消失 マンマ
ジャーゴン		+	+	+	—	—
欲求表現		大人利用+	大人利用+	大人利用+	大人利用—	大人利用+
欲求指差し		+	自分の腕 たまに大人の腕	自分の腕	大人の指差しする 指を見る	大人の腕
視線		+	+	+	+	—
理解		+	+	+	—	—
結果		1才9ヶ月発語増 応答指差し+ 微細動作器用	1才9ヶ月発語増 微細動作器用	ボディーランゲージ 微細動作、口腔筋 機能訓練指導、経 過観察 いらつき軽減 発語+ 欲求指差し+	発達相談継続 児相診断 (全体の 遅れ) 保育園 (特別枠)	児相紹介拒否 発達相談継続 再度児相診断 (自閉症の疑い) 静療院へ

の問題が107件、性格行動上の問題が67件、知能発達の問題が57件、身体上の問題が23件、習癖の問題が20件であった。

相談の期間は、1人平均75ヶ月 (最長4年10ヶ月)であった。1回で終了した子どもは75人であった。

乳幼児精神発達相談初診経路別の主な他機関紹介内容は、1才6ヶ月健診からが11人であり、その内訳は精神発達遅滞7人、自閉症3人、多動児1人であった。保護者からが4人であり、その内訳は精神発達遅滞2人、自閉症1人、難聴1人であった。3才児健診からが3人であり、その内訳は精神発達遅滞1人、自閉症1人、てんかん1人であった (表2)。

### 3. 主な子ども側の事例

5事例の1才6ヶ月児健診時からその後の結果をみると1~3例は改善し、4・5例は専門医療機関で診断を受けた (表3)。

## IV. 考 察

### 1. 1才6ヶ月児健診と発達相談

典型的な郊外住宅地のM区の1才6ヶ月児健診受診率が

91.3%であり、全国平均91.0%と比較するとわずかであるが受診率が高いことが分かった。

1才6ヶ月児健診は、運動機能、視聴覚等の障害の発見と対応、生活習慣の自立、栄養及び育児についての指導が実施されている。

乳幼児健診の目的と意義からみると、現在の日本の核家族化、少子化社会のなかで親が安心して子どもを生き育てることができる社会環境づくりが重要である。未受診のうち出生施設で健診を受けていない子どもの調査が今後必要であろう。

健診を受けた子どもの100人中約5人が発達相談を受け、男児は女児の3倍であった。母親は、人形や動物のぬいぐるみに言葉をかけたり視線をあわせたりする女児と比較し、メタリックな乗り物の玩具を黙々と分解、組み立てることに夢中になっている男児が母親の声掛けに反応しないため、発達に問題があるのではないかと考えてしまう傾向にあった。

相談理由別では、1人当たり相談件数は1.5件であった。内訳は、言語発達 (発語) 上の問題が40.7%、養育上の問題が26.8%、習癖・性格行動上の問題が14.7%であった。

健診は単なる健康診査のみでなく、統合的な子育ての支











#### 4. 主な子ども側の事例

発語がなくても応答指さし、欲求指さしや大人に視線をあわせられる、手先が器用等は発達の正常範囲であることが示唆された。

相談で要観察・要精密検査と考えられる場合は、① 理解力がなく、大人の指さしする指を見たりする、② 以前出現していた発語が何かのきっかけで消失し、現在無か少ない、③ ジャーゴンがほとんどなく、口唇確認がなににでもある、④ 視線があわず、その子ども特有の理解できない行動が多い、⑤ 視線があわず発声もなく大人の腕又は手をロボットのように使う、⑥ 発語（有意味語）の発音が不明瞭である（口唇・舌の問題、聴力の問題）⑦ 微細動作（手先の動作）が不器用で、理解力もない、以上の点がみえてきた。

いづれにしても一貫した個々の子どもに合ったきめ細かな看護を継続することが重要であり、発達を促す一助になった。

養育上の問題が最近増加傾向にあり、背景も様々である。「社会全体で」子育てのスローガンをもとに具体的支援体制を整えていく必要がある。

#### V. 今後に向けて

12年間の相談内容の報告にとどまったが、今後はこれらの結果に基づいた検証をする研究を積み重ねていきたい。

#### 参考文献

- 1) 山下光：特別支援教育と軽度発達障害．発達97：2-5, 2004
- 2) 文部科学省特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議：「今後の特別支援教育の在り方について」最終報告書．2003
- 3) 竹田契一：軽度発達障害とその乳児期の特徴．発達97：6-12, 2004